猫における皮膚糸状菌保有状況

池庄司 剛* 高橋峰雄 居神憲男 久保 滋

松田政明 高田三千人 石川 幸

広島県動物愛護センター（豊田郡本郷町南方 8915-2, 〒729-04）

（平成 3 年 9 月 5 日受付・平成 4 年 2 月 7 日受理）

Distribution of Dermatophytes Carriers in Cat

TSUYOSHI IKESYOJI*, MINEO TAKAHASHI, NORIO IGAMI, SHIGERU KUBO, MASAOKI MATSUDA, MICHITO TAKATA and MIYUKI ISHIKAWA (* Animal Protection and Pound Office, Hiroshima Prefecture, Hongo-cho, Toyota-gun, Hiroshima 729-04)

近年、犬や猫がコンパニオンアニマルとして認識されるようになり、人との結びつきがより密接になってきている反面、それらの動物からの人への感染症が危惧されている。

犬や猫における皮膚糸状菌症については、厚生省が示した「ペット動物由来人畜共通伝染病予防方策」の中の個別疾病としてもあげられている。また、その感染源として日本獣医師会の調査では、保菌動物のほか、家塵等の環境要因も注目すべきであると報告している。

そこで今回、著者らは県内で猫を飼育している家庭の協力を得て、猫の被毛および家塵を検体として皮膚糸状菌の分離を試みるとともに、猫と家族の皮膚病についての聞き取り調査を実施した。

調査期間は平成 2 年 4 月から 7 月までの 4 カ月間で、県内で猫を飼育している家庭の協力を得て実施した。50 家庭合計 57 匹の猫を対象とし、猫の被毛、落屑および家塵を材料とした。

猫の被毛、落屑は背線部をアルコール綿で清拭後、滅菌金属櫛で採取した。家塵は 1 家庭から 1 検体とし、家庭の電気掃除機により集塵されたものを検体とした。

検体約 0.02g に 5ml の生理食塩液を加え、よく攪拌後、3,000r.p.m. 5 分遠心し、その沈渣を DTM 培地（クリニカルサイエンス社、アメリカ）とサブロー寒天培地（ニッスイ、日本）に接種し、25℃で、1 週間から 2 週間培養した。発育集落の特徴、培地の変色等から皮膚糸状菌が疑われる集落について継代培養後、釣菌し、大分

生子等の形態の観察を行って同定した。

また、検体の採取時に猫と家族の皮膚病に関する病歴についての聞き取り調査を実施した。

被毛では、50 家庭中 11 家庭（22.0%）、57 検体中 14 例（24.6%）から *Microsporum* が分離された。*Trichophyton* は分離されなかった。家塵では、50 家庭中 10 例（20.0%）から菌が分離された。そのうち 8 例は *Microsporum*、1 例は *Trichophyton* であり、残りの 1 例では両者が分離された。

年齢別、性別に分けて分離状況を見ると、ともに分離率に有意差はみられなかった。

飼育形態別に分離状況を見ると、表 1 のとおり、被毛では屋外飼育の猫の方が屋内飼育の猫よりも分離率が高い傾向がみられた。*Microsporum* の中には土壌由来の菌もあり、外部環境からの猫への汚染が考えられた。家塵では、屋内飼育の家庭の塵からの方が屋外飼育の家庭の塵からよりも分離率が高い傾向がみられ、猫から家庭内への汚染が推察された。

検査した家庭における猫の通算飼育年数別の分離状況を見ると、表 2 のとおり被毛では 20 年以上飼育経験のある家庭の猫の被毛から 50% と高率に分離され、20 年未満のものと比較して有意差が認められた。家塵では、飼育年数が 5 年未満の家塵からは分離されず、被毛の検査結果をあわせて考えると、通算して長期間飼育すると被毛、家塵ともに汚染が高率になる傾向がみられた。

被毛から *Microsporum* が分離された 11 家庭のうち 3 家庭から同一真菌が分離された。また対照として猫を飼っていない家庭の塵 14 例からの分離を試みたが、すべて陰性であり、猫と家塵との間に相互汚染がおきている可能性が考えられた。

猫を 2 匹以上飼育している 7 家庭について 2 匹ずつ検

* 現所属：広島県食肉衛生検査所東部支所（福山市三吉町 1-1-1, 〒720）

* Present Address：Meat Inspection Center, Eastern Branch, Hiroshima Prefecture, Miyoshi-cho, Fukuyama-shi, Hiroshima 720

表1 飼育形態別皮膚糸状菌分離状況

検 体 飼育形態	被 毛				家 塵			
	屋 内	屋内・屋外	屋 外		屋 内	屋内・屋外	屋 外	
検 査 数	16	33	8		14	29	7	
分 離 数	3(18.8)	7(21.2)	4(50.0)		4(28.6)	* 5(17.2)	1(14.3)	
<i>Microsporum</i>	3(18.8)	7(21.2)	4(50.0)		3(21.4)	5(17.2)	1(14.3)	
<i>Trichophyton</i>	0	0	0		1(7.1)	1(3.4)	0	

* 1例重複, (%)

表2 通算飼育年数別皮膚糸状菌分離状況

検 体 飼育年数	被 毛					家 塵				
	<5	5~10	10~15	15~20	20≤	<5	5~10	10~15	15~20	20≤
検 査 数	12	17	4	3	14	12	17	4	3	14
分 離 数	2	1	1	0	7	0	5	1	1	3
分離率(%)	16.7	5.9	25.0	0	50.0	0	29.4	25.0	33.3	21.4

査した結果, 被毛については3家庭から2匹ともに同一真菌を分離し, 猫から猫への汚染も考えられた. 家塵についても2家庭から分離しており, 多頭飼育, また通算飼育年数が長くなるほど汚染の機会が増えるものと思われた.

猫の皮膚病についての聞き取り調査で, 皮膚病のある猫2匹のうち被毛から1例 *Microsporum* が分離された. また, 以前に皮膚病があった猫5匹のうち被毛から1例, 家塵から1例 *Microsporum* が分離された. しかし, 今回, 皮膚糸状菌を分離した猫のほとんどが健康保菌猫であったことは注目すべきであると思われた.

家族の皮膚病についての聞き取り調査で, 皮膚病変のみられた4家庭のうち, 1家庭の塵から *Microsporum* と *Trichophyton* を重複して分離されたが, 例数が少なく, 人と猫および家塵との関連については, 今後さらに例数を重ねて検討する必要があるものと考えられた.

今回の調査により, 皮膚病変の有無に関係なく猫が皮膚糸状菌を保有していることが確認された. また, 猫と外部環境, 猫と猫, 猫と家塵間の相互汚染が示唆された.

特に猫は家庭の内外を自由に徘徊するので, 飼い主に対しては公衆衛生的見地に立脚した適切な猫の飼育法を指導する必要があると思われた.